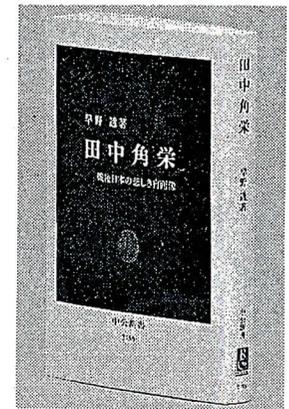


忘れられた怒りと痛み

早野透著

田中角栄 戦後日本の悲しき自画像



(中公新書・0877円)

はやの・とおる 1945年生まれ。元朝日新聞社編集委員。現在、桜美林大教授。

田中角栄は戦後を象徴する政治家である。約40年前、「列島改造論」を掲げ、宿敵・福田赳夫を僅差で抑えて、当時史上最年少の54歳で総理の座を勝ち取った。旺盛な行動力に幅広い知識と明晰な分析眼を併せ持ち、「コンピュータ付きブルドーザー」と呼ばれ、数々の政策課題を実行に移した。ロッキード事件で逮捕された後は、金権政治の象徴のごとく負の烙印を押され、自民党が下野した1993年、それを見届けるかのように永眠した。

筆者は元朝日新聞政治部記者。本書には、田中の人生が簡明に記されている。上京し転職を重ねて起業した青年時代、政治の世界へと入り地歩を固めた若手議員時代、岸・池田を支えた閣僚時代、幹事長を経て総理就任という栄光の権力時代、そしてロッキード事件からの転落時代。金脈問題や金権政治が批判に晒された田中は、失意のうちに引退する。

本書を際立たせているものは、福田赳夫の「理想主義」と対比された田中の「リアリズム」である。田中にとって、政治は「最高の道徳」などではない。「政治は力」なのである。飢餓デモクラシー、生活デモクラシー、業者デモクラシーなどの言葉が示しているように、田中にとって政治とはどややって空腹を満たすのかという現実的な要請であった。田中が駆け抜けた高度成長期は「平和」と「豊かさ」の時代である。都市と農村の格差是正を目指した「列島改造論」や原発建設の交付金を制度化した「電源3法」などに通底する政治思想は、経済成長に支えられた「明るい進歩思想」なのである。

ロッキード事件直後の総選挙でも田中は圧勝した。何故か？ 新潟三区を取材した本多勝一はこう書き記している。都会のエリートたちに「ふみつけにされつづけた側」の怒りと痛みなのだ。豊かになった今、田中の政治観を噛みつぶすことは易しい。だが、私たちはこういう怒りや痛みを忘却してはいないだろうか。田中角栄とは貧しかった過去と対話するための鏡なのかもしれない。

(九州大准教授・政治学 大賀哲)

西日本新聞 2013.1.6.